

氏名（本籍） カミガワ タロウ 鴨川 太郎（東京都）  
 学位の種類 博士（音楽）  
 学位記番号 博音第25号  
 学位授与年月日 平成8年3月25日  
 学位論文等題目 <演奏曲目> 「19世紀イタリアのバリトンの迷宮で」  
 ドニゼッティ他の作品より

デコンストラクション

<論文> 《ドン・パスクワレ》の解体=構築

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	鈴木寛一
論文審査会(主査)	"	"	( " )	角倉一朗
(副査)	"	"	( " )	鈴木寛一
( " )	"	"	( " )	大町陽一郎
( " )	"	"	( " )	高橋大海
( " )	"	"	( " )	平野忠彦
( " )	"	"	( " )	原田茂生
( " )	"	"	( " )	佐藤真
( " )	"	助教授	( " )	三林輝夫
( " )	"	"	( " )	峰村貞子
( " )	"	"	( " )	多田羅迪夫
演奏審査会(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	鈴木寛一
(副査)	"	"	( " )	原田茂生
( " )	"	"	( " )	高橋大海
( " )	"	"	( " )	大町陽一郎
( " )	"	"	( " )	角倉一朗
( " )	"	"	( " )	佐藤真
( " )	"	助教授	( " )	三林輝夫
( " )	"	"	( " )	峰村貞子
( " )	"	"	( " )	多田羅迪夫

(論文内容の要旨)

イタリア・オペラ史上、ロッシーニとヴェルディという二大巨匠の間で、ややもすると軽々に扱われがちなドニゼッティの最高傑作の一つとして、また18世紀的オペラ・ブッファの事実上の終焉を告げるものとして大方の評価が定まっているドラマ・ブッフォ《ドン・パスクワレ》

を、本稿は記号論的視点から再布置化してゆく「過程＝訴訟」そのものである。

記号論自体が現代諸学の交差点上にあるため、当然、本稿は精神分析学、現象学、哲学的人間学などとの学問的交接を余儀なくさせられる — 膨大な（単なる解釈にすぎなかった）既成事実のパラノイア的羅列と訣別した本稿は、結果として、「つねに」「すでに」「そこで」（＝複数の私＝自己の中で）起きている差異化のスキゾフレニー的な書記行為とも見える。

序論 0. においては記号論の今日的状況を概観し、本論 1～3. においては《ドン＝バスクワレ》と相互嵌入していると思われる種々の記号について考察を深めた。

1. オペラ・ブッファは、筆者の修士論文を大幅に修正したものであり、2. 特定共時態は、基本的にロッセッリの近著トリコルディ社から昨年出版された《ドン＝バスクワレ》の意欲的なCD解説書に負っている。3. ベルガモは、筆者が足繁く通ったドニゼッティ博物館の名誉保存員カピターニオ氏の作成文書と、目下ドニゼッティ研究の第一人者であるアッシュブルック氏の『伝記』（近年イタリア語版も出版された）をもとに、筆者が創作した。

1～3も「すでに」「そこで」《ドン＝バスクワレ》の「解体＝構築」ではあるが、4. においては作品をテキストとして内部から解体してゆく作業をした — その実践は、デリダの「散種」およびクリステヴァの「パラグラマチズム」の理論の援用によって行われ、次々に発見がなされた。とりわけ、それらの理論の母胎ともいべきシュールの「アナグラム」論を知った筆者の前に、秘められたドニゼッティ自身の「妻の名」が立ち現れたのであった。それによって、《ドン＝バスクワレ》の読み（のゲシュタルト）は完全に組み替えられてしまった。

この過程を通じ、筆者は「心身一如」である人間の内奥の営みに開眼させられた。また、今後詩を歌ってゆく者も、積極的な「テキスト」と「過去の演奏習慣」の読みを通して、「創唱」ということに思いを致さねばならないことにも気がついた — 演奏とは、歴史がそうであるように、不可逆的でありつづけ、「今まで聞いたこともないもの」（止揚なきパラダイム・チェンジ）でなければいけないのだから。